

3. 紹介「海外に学ぶ」：芸術ハコモノでイメージ転換再生 スペイン・ビルバオ その1

(Japa 理事 小畑きいち:青山学院大学元客員教授)

ビルバオは、スペイン北部のバスク自治州ビスカヤ県の県都。ビルバオは中世に聖地サンチアゴへの巡礼街道として栄えた宿場町に始まる。今でも旧市街のネルビオン川沿いに、一部中世の風情が残る。人口は約35万人、周辺を含める都市圏としては約100万人規模である。ビスケー湾から19km 遡った位置にある工業都市かつ河口都市である。バスク自治州の中心都市でもある。



ビルバオ市地理位置

19世紀には良質な鉄鉱採掘により鉄鉱山都市となり、ビルバオ港から大量の鉄鉱石が欧州を主とした国外に輸出された。さらに1950年以降は造船業、化学工業なども発展し、鉱業から工業都市へと発展を遂げスペイン有数の工業地帯となった。しかし1980年代以降、徐々に重厚長大な産業が衰退に向かい、ビルバオ市も衰退に向かった。1980年代には市内の失業率も16%以上となり衰退が著しかった。

バスク地方は、スペインとフランスにまたがる独自の文化と他のユーロップ系と異なるアジア系に近い独特なバスク語を持つなど独自伝統を有する民族地域であることから長い間、独立運動を繰り広げ、スペイン政府と武装集団「バスク祖国と自由」の間で爆弾テロや要人暗殺など血と血で争う戦闘が続いてきた。スペイン政府は、政治・行政権限を委譲する地方分権を進めバスク民族を懐柔するために1979年には大幅な自治権を認めバスク自治州とした。また自主徴税権も認められ、このような寛容なスペイン政府の政策によってかつて過激的だった独立運動は鎮静化して、独立への盛り上がりを抑える役目を果たしてきた。その結果、2006年には過激組織「バスク祖国と自由」は停戦を宣言し、現在は平穏を保っている。

***戦国時代に来日のイエズス会宣教師のフランシスコ・ザビエルはバスク人貴族出身であった。**

こうした自治権拡大で、自主財政、政策調整、都市計画など施策の横断的な調整が可能となり、スペイン中央政府の関与なく、バスク自治州政府は財政基盤がしっかりしたことで基盤整備などの地域開発プロジェクトが主導出来るような行政基盤ができた。

バスク自治州は、税徴収に関して特権を付与され、独自に税を決定して徴収できることから、経済活動などに雇用創生に対して柔軟な企業誘致・集積などに対する施策提案を可能となった。

しかし、国からの移転支出・補填がなしとなり、国に対して外交・国防などに関する分担金を国に支払義務を負うこととなった。従来型の工業都市から見切りをつけ文化振興による産業構造の大転換を指向すると決した。地域衰退の象徴となった旧港湾地区の設備の撤去や移転による革新的な都市再生を構想した。その中にはこれまで検討にも入らない文化創造についても考慮することとした。1989年に策定されたビルバオ大都市圏活性化戦略(ビルバオプラン)は、港湾地区再整

備、公共交通・道路など都市基盤、地域産業振興、文化施設の拡充・再修、公共施設の充実など、広範な内容を盛り込んだ。活性化のための基本理念として、開放化、多様化、統合的、近代化、創造的、社会的、文化的の7要素を掲げた。その実施のために、人材への投資、近代的サービス産業都市への転換、移動アクセスの重視、環境保全、都市再活性化、文化創出、官民協働、社会共生を都市再生ソリューションの命題とした。

ビルバオ大都市圏活性化構想において、ビルバオ市内を流れるネルビオン川に沿いのアバンド地区の旧港湾施設跡に革新シンボルとして文化施設新設を構想した。文化創生に対してバスク自治州・ビルバオ市幹部は従来の経緯にとらわれず思い切って外部組織との協働を模索した。同時期に、米国のソロモン・



ネルビオン川と旧市街

R・グッゲンハイム財団は世界的なグッゲンハイム美術館グループを目指す「グローバル戦略」を探っていた。そのような時にグッゲンハイムの美術資産に注目したバスク自治州政府からビルバオ市の再開発構想における美術館進出を打診された。強い危機感を持ち起死回生をねらうバスク自治州・ビルバオ市、グローバルを目指す財団が紆余曲折の結果、利害関係を調整しながら数か月の交渉を経て基本合意が結ばれた。合意は、グッゲンハイムからは美術館建造は衆目を集めるような新奇な外観を求め、美術館建設費用負担など受け入れ側にとってコスト負担が大きく極めて妥協的内容であった。

新進産業の誘致を期待していた地元産業界や市民からの反発もあったが計画は採決された。美術館は設計コンペの結果、プリツカー賞受賞の建築家フランク・ゲーリーの案が採用された。その外観は、船や魚を思わせ自由に流麗な形状で外観はチタン板盤に覆われ光り輝き超現代的で奇抜なフォルムは誰にも強い印象を与えるものであった。外観デザインの新奇性と



グッゲンハイム美術館

近代アートを感じさせる奇怪な建物が衆目を集め評判を呼び、1997年竣工直後から国内外から予想外の年間100万人の来場を数えた。市内外の住民の関心も高めることに成功し、竣工からわずか3年で初期投資を回収できた。



ビルバオ河港跡地

ビルバオ・グッゲンハイム美術館の高い評判で、ビルバオ市の再開発計画のシンボルと見られるようになった。

(つづく)